

平成5年度第3回11月29日

演題：サイモンフレーザー大学を通して見た異国（カナダ）

演者：山本裕二（体育科学部）

1992年10月14日から1993年10月1日までの約1年間、文部省長期在外研究員としてカナダ・British Columbia州・Burnaby市（Vancouver市に隣接している）にあるSimon Fraser Universityに滞在し、研究を行う機会をえた。この大学は、1965年に開学された比較的新しい大学であった。そんな中でも私個人が興味を持ったのは、非常に進んだコンピュータネットワークの利用である。Academic Computing Serviceと呼ばれる学内のコンピュータサービスは、10箇所を数える端末室が学内に設置され、ほとんどのところが授業はない土曜・日曜まで利用できるようになってきている。またその内の6箇所には共用のプリンタがあり、学生達はコピーカードと同じようなプリンタカードを購入しどこでも印刷できるように配慮されている。したがって、通常の学生のレポート類はすべてこれらのコンピュータを用いて作成されるようになっており、そのためのアプリケーションなども自由に使えるようになってきている。また、図書館の文献検索やデータベースの検索にも当然のことながらこれらのネットワークが利用されている。こうしたネットワークは大学内だけではなく、同じBritish Columbia州にある他大学（といってもUniversity of British Columbia (UBC) とUniversity of Victoria (UVIC) の2校）ともつながっており、様々な情報が利用可能であった。また、学科内のセミナーの通知などもこうしたネットワークの電子メールで送られており、事務系の職員も教官や学生などもほとんどすべての者がこうしたサービスを利用していたことには多少驚かされた。しかしながら、近い将来日本の多くの大学でもこうしたシステムが導入されるであろうと思われる。

ところで、私はDepartment of Applied Scienceの1学科としてあるSchool of Kinesiologyの中のHuman Motor Systems Labという研究室

に所属させていただいた。わが国でいうならば、体育心理学研究室に相当するようなスタッフの顔触れ（心理学を専門とする教官のみ）なのであるが、研究テーマは多岐にわたっていた。その中からいくつかを紹介してみると、「物を掴む動作の分析」に関連する研究として、物の大きさや重さなどを変えてその掴むまでの動作の違いを検討する実験、物を掴む動作に必要な視覚情報について視覚遮断法により検討する実験、コンピュータマウスの動作特性とそれを用いた際の人間の動作特性を検討する実験などが行なわれていた。また「運動制御のモデル化の研究」として、前腕の屈曲・伸展動作の学習中に当該筋にバイブレーターを用いて、筋感覚フィードバックを妨害する実験、またこうした実験結果を基にした、ニューラルネットワークでの記述化などが行なわれていた。これらの研究課題の多くは、どちらかと言えば人間工学的な研究領域に近い内容であったため、研究の目的や結果の細かな検討よりも方法論に関してよりたくさん議論をした。そこで興味深かった点は、基本的な考え方として従来の心理学的指標のみならず、これからの運動制御や運動学習に関する研究においては人間の動作自体をより詳しく観察していく必要があるということで、これは私自身の考え方とも共通するものであり、そのデータ収集や分析方法について様々な点から議論することができた。現在対象としている動作はその大きさ（自由度）の点からは彼らの研究対象と私自身の研究対象は異なるが、今後とも情報交換しながら、いつかは運動を記述する同じモデルに行き着くことをお互いに期待して終わった1年であった。